

○司会（館内閣府経済社会総合研究所特別研究員） おはようございます。ただいまから第52回「ESRI－経済政策フォーラム『オリンピック・パラリンピックを契機とした地域活性化』」を開会いたします。

皆様には、お忙しい中、多数の方においでいただきましてありがとうございます。

本日の司会を務めさせていただきます内閣府経済社会総合研究所特別研究員の館でございます。どうぞよろしく願いいたします。

本日の報告者及びパネリストでございますが、大変すばらしい方に来ていただいておりますが「登壇者略歴」という資料を配付しておりますので、詳細はそちらをご覧くださいければと思います。

それでは、早速、最初に内閣府経済社会総合研究所次長の杉原より開会の御挨拶を申し上げます。

○杉原次長 内閣府経済社会総合研究所次長の杉原です。よろしくお願いいたします。

本日は、第52回「ESRI－経済政策フォーラム『オリンピック・パラリンピックを契機とした地域活性化』」に御参加いただきまして、ありがとうございます。

経済社会総合研究所におきましては、内閣府の経済・財政政策の企画・立案の知恵の場として、実証的な政策研究を中心に各種の研究を実施しております。そうした研究の成果の一端をこのような経済政策フォーラムという形で御関心の皆様とも共有させていただいております。

前回は2月に「マイクロデータを活用した政策研究について」というフォーラムを開催させていただいたところであります。

本日は、先月、2020年オリンピック・パラリンピック東京大会の開催基本計画がIOCに提出され、さまざまな取り組みが本格化する中、東京大会に関連した研究の成果の一部を共有させていただきたいと思っております。

政府といたしましては、平成26年6月24日に閣議決定いたしました「経済財政運営と改革の基本方針2014」において、東京大会は日本全体の祭典であるとともに、世界に日本を発信する最高のチャンスであるとして、我が国が活力を取り戻す弾みとなるものであり、その開催に向け政府一丸となって取り組むとしております。

また、同大会は参加国との人的・経済的・文化的な相互交流を図るとともに、スポーツ立国、グローバル化の推進、地域の活性化、観光振興、環境技術とイノベーションの発信等に資することを重視して取り組むものとしております。

こうした中で、経済財政諮問会議は東京大会に全国津々浦々の地域が参画する機会とするべく「ホストシティ・タウン構想」を提案しております。

我々といたしましても、東京大会についての政府の方針を踏まえつつ、同大会を地域の活性化につなげる方策に関しての研究を本年度1年間実施してまいりました。

本日は、その研究成果の発表を兼ねて研究会の有識者委員の方々からお話をいただきたいと思っております。

有識者委員の方々としては、オリンピック・パラリンピック大会の中でも地域活性化に関係する広義の文化プログラムの各分野における一線の方々にお集まりいただきました。

また、本日は地方自治体の職員の方、あるいは民間企業の方、非常に多数の方が御参加いただいております。

2020年に向けて日本全体が一丸となって地域活性化の取り組みが進みますことを期待して、本フォーラム開催に際しての御挨拶とさせていただきます。

○司会 ありがとうございます。（拍手）

それでは、早速ですが、研究所の研究会の委員でもありますニッセイ基礎研究所研究理事の吉本光宏様より、基調講演として「文化プログラムによる地域活力の創造」についてお話しいただきます。

吉本委員、どうぞよろしくお願ひいたします。

○吉本委員 皆さん、おはようございます。ただいま御紹介いただきましたニッセイ基礎研究所の吉本です。

私からは、五輪と文化プログラムのことについてお話をさせていただきたいと思っております。

お手元にスライドの抜粋をお配りしておりますけれども、きょうお話ししたいと思っておりますことは大体4つございます。

オリンピック・パラリンピックと文化の関係、大成功だったと言われる前回のロンドン五輪の御紹介、東京五輪に向けてどういう準備が進んでいるのか。最後に、全くの私案なのですが、2020年にこんなことができたらいなということについてお話ししたいと思っております。

御存じの方も多いかと思いますが、オリンピックの理念を定めました「オリンピック憲章」というものがあって、そこには「スポーツを文化と教育と融合させる」と明記されております。オリンピックというやはりスポーツの祭典と受け取られがちなのですが、実はその理念には文化・教育も深く根づいております。

近代五輪の祖と言われるクーベルタンもこんな言葉を残しています。「オリンピックはスポーツと芸術の結婚である」と。実際、文化プログラムは100年以上前から行われてきました。

具体的には1912年のストックホルム大会から始まるのですが、当初は芸術競技ということで芸術でも競い合う形で行われて、メダルも授与されておりました。その後、芸術展示という形に変わり、前回の東京五輪のときもさまざまな芸術作品の展示や公演が行われております。

それが1992年のバルセロナ大会からさらに拡充されて、バルセロナはソウル五輪が終わって以降4年間、毎年大規模な文化フェスティバルを行いました。その流れを今までにない規模で拡充させたのが前回のロンドン五輪大会でした。

では、ロンドンではどういうことが行われたのか、幾つか御紹介したいと思います。

ロンドン五輪の写真はちょっと懐かしい気がしますけれども、このタワーの画像を覚えていらっしゃる方はいるかと思います。この奥がメインスタジアムなのですが、実はこのタワー自体がアニッシュ・カプーア（Anish Kapoor）というアーティストの巨大な彫刻作品です。ですので、オリンピックパーク自体にも芸術とスポーツを融合するということがロンドンでは実現したわけです。

具体的なプログラムの概要は、こちらに整理したとおりなのですが、ロンドンでも北京五輪終了直後から4年間の文化プログラムが始まりました。そのフィナーレとして、大会の開会式の1カ月前からパラリンピックの閉会式まで12週間、大規模な国際フェスティバルが行われております。

4年間の文化イベントの総数は約18万件、新しい作品が5,000作品以上生まれ、4,000万人以上が参加し、総予算220億円という非常に大規模なものでした。

特に重要なのは、ロンドンだけではなくて英国全土1,000カ所以上、小さな都市も含め、自然環境の中とか浜辺とか、そういったところでたくさんの催しが開かれたということです。

イギリスの五輪ですから、イギリスの文化を世界に紹介するのは当たり前のことだと思うのですが、彼らはそのチャンスを世界中に広げました。そのため、アスリートと同じ204の国と地域から、何と4万人以上のアーティストが参加しています。日本から参加したアーティストも大勢いました。

文化プログラムでも、オリンピック全体のテーマ「インスパイア（Inspire）」に関連したテーマが設定されておりますけれども、文化に関しては「Once in a Lifetime」、一生に一度きりの体験を文化で提供したいというスローガンが掲げられました。

カルチュラル・オリンピアードのフィナーレとして最後に行われたフェスティバルの特徴は、6つあると言われております。特に無料のものが非常に多いこと。ふだん考えられないような場所、劇場や美術館以外のところで行われているということ。オリンピックやパラリンピックのテーマに基づいた作品であるということ。前触れなく突然何か文化イベントが始まることなどです。

幾つか代表例を写真で御紹介します。

ロンドン市庁舎は、ノーマン・フォスターの設計による卵型のガラス張りの建物なのですが、その外壁を使ってダンサーが屋上から降りてくるというパフォーマンスが行われました。

それから、ロンドンに行かれた方は御存じかと思いますが、テムズ川に「ロンドン・アイ」という巨大な観覧車がございます。このスポークのところを使って、同じチームによるダンスパフォーマンスが行われています。こんなことが日本でできるのかちょっと心配ではありますが、ロンドンはそういうことが行われました。

次は私が実際に見たものです。ストラットフォード・ストリートというロンドンでも随一の繁華街のショッピングセンターのショーウィンドーを使って「The World in London」

と題した写真展が行われました。ロンドンというのは移民をたくさん受け入れていて、一説によれば300以上の言語が話されると言われております。ですので、ここでもアスリートと同じ204の国と地域からロンドンにやってきた移民のポートレートを3年間かけて撮影し、その写真が展示されました。

中には移民が見つからなかった国もあります。マーシャルアイランドもその一例ですが、その場合は「Are you from Marshall Islands?」ということがポスターに書かれていまして、ここに電話をしてくれたらあなたの写真を撮って展示しますということになっています。

ポートレートの下には小さなQRコードがあって、それをスマートフォンで読み取ると写真家美術館のホームページにつながって、その方がなぜロンドンに来たかという個人史が見られる。そういう展覧会でございます。

次はマーティン・クリードという方の「この国のあらゆるベルをできるだけ早く、できるだけ強く3分間鳴らせ」という作品です。イギリスにはビッグベンを含め、4つの議会がございますので、全ての議会のベル、個人個人の持っているベル、そしてこのアーティストが開発したスマートフォン用アプリの「リングトーン」というベルを、開会式と同時に鳴らすというアートプロジェクトに、全国で300万人近い人が参加したそうです。

地方都市の例もいくつか紹介します。自然景観の中で行われた代表的なものが「Peace Camp」という催しで、全英の8つの海岸に2,000張りのテントが張られました。夕方になるとライトアップされて、そこから静かな音楽、波の音とか風の音、そして英国を代表する女優が朗読する「愛の詩」が流れてきます。これはオリンピックのテーマである「平和」を考えようというアートプロジェクトでした。

「Unlimited」という障害者のアーティストの大規模なフェスティバルも行われました。パラリンピックが障害のあるアスリートの能力を称賛するものだとすると、芸術の世界でも、障害のあるなしに関係なく人間の能力は「無限 (Unlimited)」だということを称賛する大規模なフェスティバルでした。パラリンピックの開会式にも、障害のあるアーティストがさまざまな形で出演しました。

日本を代表する世界的なアーティスト、オノ・ヨーコさんの展覧会もハイド・パークの美術館で行われました。屋外展示として、公園の芝生に白い巨大なチェス盤が設置されて子供たちが遊んでいました。これは白黒がないチェス盤なのですが、作品のタイトルは「Play it by trust」といいます。つまり敵味方がない、互いに信頼しあってプレーをしよう。ですから、これも平和をテーマにしたオノさんの作品ということになるかと思えます。

街なかで展開された代表的なものが「Piccadilly Circus Circus」というもので、ロンドン一交通量の多いピカデリー・サーカスを1日通行止めにして、朝から晩まで屋外でサーカスを行いました。

次も、私が実際に見たものなのですが、ロンドン市内にはイギリスの歴史上の重

要人物の彫像がたくさんございます。それを20体ほど選んで帽子をかぶせる「HATWALK」というプロジェクトで、帽子をかぶった彫像を巡ってイギリスの歴史を知ってもらおうというものです。

例えば、トラファルガー・スクエアのネルソン提督の彫像にも帽子が被せられました。写真ではわかりにくいですが、実はこれは高い柱の上に立っているので高さは52メートルあります。52メートルの彫像に帽子をどう被せるのか。実は、その高さに届くクレーンがイギリス中に2台だけあったそうで、夜中に全部通行止めをして、そのクレーンでこの帽子をかぶせたんですね。

帽子のデザインはユニオンジャックとトーチがモチーフになっているのですが、この帽子をつくったメーカーはロック・アンド・カンパニー（JAMES LOCK & CO）という会社で、世界最古の帽子メーカーです。そしてその帽子メーカーは200年前のネルソン提督の実際の帽子もつくっているのです。そのあたりが洒落ていて、イギリスの王室に代表される帽子文化をアピールしようという意図が伺えます。同時に、老舗のデザインだけではなくて、レディー・ガガとかマドンナの帽子をデザインするようなフューチャリスティックなデザイナーの帽子も被せられ、イギリスの現代のファッションを売り込んでいこうというねらいもございます。

ボンド・ストリートにあります有名なチャーチルとルーズベルトの彫刻にも帽子が被せられましたが、なぜかアメリカ大統領は「SPAM」と大書された帽子で、これはイギリス流のジョークかなと思います。

彫刻の場所が記載された地図も作られ、大体都心部にありますので、地図を頼りに回っていただくという趣向になっていました。

しかも帽子の設置作業は全部夜中に行われ、朝起きたら突然帽子をかぶっているというしかけになっていました。ロンドン市の方々はそのために徹夜をしたとおっしゃっていましたが、新聞各紙にちゃんと報道されていました。この帽子は10日間ほど展示された後、オークションにかけられて、そのオークションの収入でまた文化プログラムを行うという非常に優れた企画だったと思います。

地方の例として、バーミンガムを中心都市とするWest Midlandsという地域の文化プログラム例も少し御紹介します。

そこでもさまざまなものが行われまして、国際的なもの、多くの市民が参加できる参加型のもの、地元の文化団体の活動を強化するようなもの、そして大がかりな文化イベント、大体この4種類ぐらいに分類できるようです。

国際的なものの代表例は、シュトックハウゼンというドイツ人の作曲家のオペラの作品でした。これはめったに公演されないのですが、なぜかといいますと、作曲家の指示で全ての演奏家が空中に浮いていなければいけないというオペラ作品なのです。ですので、バイオリニストも空中ブランコのようなものに乗っていますし、声楽家も脚立の上で空中に浮いています。

この作品の目玉にヘリコプターの四重奏というのがあります。実際に4機のヘリコプターを雇って、そこに弦楽奏者が乗って、そこから弦楽奏者が風景を見ながら演奏して、それが会場に映像とともに流れる。そういうものもこのバーミンガムで行われております。

他にも大規模なものとして「ザ・ヴォヤージュ (The Voyage)」という巨大な船を広場に出現させて、そこでダンスパフォーマンスを行う。そんなさまざまな文化イベントが地方都市でも行われております。

West Midlands地域の文化プログラムについては、地域へのインパクトに関するレポートが出ています。それによれば、参加者数は約300万人で、そのうち16万5,000人は域外からの訪問者でした。また、68%がもう一度この街に来たいとアンケートに答えています。他にも、シビック・プライドが向上したとか、経済効果もかなりの規模になっているといったことが報告されています。つまり五輪の文化プログラムは、地域にも大きな効果をもたらすということがイギリスの例でも報告されております。

West Midlandsで行われた文化イベントの総数は約1,000件だったのですが、注目したいのは、報告書にはそれに協力した団体の名前が小さな文字ですべて掲載されていることです。芸術団体だけではなく小規模なコミュニティ団体など1,000近い団体がそれだけの文化イベントを実施するために汗を流して協力した。それでこの大規模なものが行われたということでございます。

ちょっと短いですが、ロンドン五輪の文化プログラムの映像がありますので、ご覧ください。

#### (映像)

駆け足でしたけれども、ロンドンでは大体このようなことが行われました。

では、東京はどうかということなのですが、東京もIOCに提出した立候補ファイルの中にちゃんと文化のことが書かれております。

時間が限られていますので詳しくは御説明しませんが、例えば東京はロンドンの「Unlimited」を継承しますということを宣言しております。そして、皆さんも御存じのように東京開催が決定したということです。

実は東京都は、五輪招致を始めた2008年から文化政策を強化するためにさまざまなことを行っております。

写真でざっとご覧いただきたいのですが、外国人の方にお茶をもてなす大茶会ですとか、六本木で終夜行われるアートイベント、夢の島で行われました大規模な演劇作品。他にも映像の作品だったり、音楽の作品だったり、子供向けのプロジェクトだったり、地域で美術館や劇場以外の場所でもさまざまなことが行われています。

「あまちゃん」の音楽でブレイクした大友良英さんの屋外の音楽パフォーマンスも行われました。

東京都では舛添知事が就任してから、第4期の芸術文化評議会として新しいメンバーが入り、その下にプログラム検討部会というのができてさまざまな検討をしております。

文化庁でも文化審議会でも検討を始め、12月に2020年に向けた文化イベント等の在り方検討会というのができて、国も東京都もいろいろ検討を始めている状況でございます。

では、2020年にどんなことを行うべきなのか。これは全くの私案でして、どこにもオーソライズされていませんけれども、こんなことができたならと私が勝手に思っていることを幾つかお話ししたいと思います。

まず、文化プログラムはいろいろなところで検討されているのですが、ただイベントをやっておしまいというのでは意味がない。何のためにやるのかということをもっと最初から明確にする必要があるのではないかと考えています。

つまり文化プログラムのテーマということで、「Discover Tomorrow」というのがオリンピック全体のテーマなのですが、「スポーツには世界と未来を変える力がある」というのが基本計画にも出ているのですが、それは芸術・文化でもできると思います。つまり芸術・文化を通して世界をよりよいものにしていこうというようなビジョンを掲げて、さまざまなことをやったらいいのではないかと考えています。

特に日本は今、課題先進国とも言われ、人口が減り始めて超高齢社会になったわけですが、スポーツとか文化というもので超高齢社会が支えられているというような成熟した新しい先進国のモデルを提示できないかなと考えています。

そのために3つ大きな枠組みで考えてみました。1つ目は「アートサイト日本2020 without Tokyo」です。「2020」は語呂合わせで、「without Tokyo」とあるのは、東京ではとにかく何かいろいろなことが行われるだろうからそれ以外の地域で取り組もうということです。

この私のアイデアは、例えば各都道府県単位で、40～50件の各地の自慢の文化、世界に紹介したいものを選び出す。それはさまざまなものがあると思うのです。伝統的なものがあるのもいいし、食文化のようなものがあるのもいいかもしれません。それを世界中に五輪の機会にアピールするというアイデアです。これは今度の五輪を東京だけに終わらせず、各地の文化観光などにもつなげようというものです。

これはイギリスの旅行ガイド大手のRough Guide社のホームページなのですが、彼らは日本で見逃してはいけないところを順位づけしていて、瀬戸内海の直島が6位になっています。

御存じの方も多いと思いますが、直島はアートの島ということで世界中から注目されていますが、京都、築地とかと並んで直島が6位になるなど、日本の人気スポットは、文化的なものが非常に多い。

ですので、オリンピックを機に日本独自の2020カ所のウェブサイトをつくる。しかもそれを五輪に参加する全ての国々の言語に対応させてつくるという案です。一度つくってしまえば2020年以降もメンテナンスをするだけで活用できますから、日本全国の文化を世

界にアピールするサイトをつくるということが有効なのではないかというのがこのアイデアです。

このアイデアをイメージするために、徳島県が作りました「vs東京」という映像をご覧くださいと思います。私は徳島が郷里なので、ぜひこの場で宣伝をしたいと思ってなのですけれども、3分ぐらいの映像です。

(映像)

少し解説しますと、この映像に映っている阿波踊りと阿波藍、人形浄瑠璃、それから、背景に流れている第九が徳島県の4大文化モチーフです。実は第九の日本初演というのは徳島の鳴門で行われました。

人形浄瑠璃のための農村舞台というのが徳島では100棟残っております。小さな山村の中にそういうものがあるというのは全国一と言われていますが、そうした徳島の文化をアピールしようという映像です。

(映像終了)

この映像は別にオリンピックのためにつくったわけではないのですけれども、先ほどのサイトのアイデアは静止画ですが、可能なら映像もつくって世界中にアピールする。そのことによって地域の文化を国際的に発信し、地域を活性化することができるのではないかと、ということで、ご覧いただきました。

文化プログラムを全国展開するとき、既に日本には素材が山のようにあります。お聞きになったことがあると思いますが、トリエンナーレ、ビエンナーレという国際芸術祭も本当に全国各地で行われておりますし、大都市だけではなくて小さな農山村でも行われています。これほど盛んなのは恐らく日本以外にはないと思います。それをこの機会にアピールできるのではないかと。

そして、現代的なものだけではなくて、やはり日本の古典的な芸能、郷土芸能やお祭り、それも世界にアピールできると思います。

例えば、去年の8月の末には岩手県陸前高田で、岩手県内の郷土芸能が集まり、バリ島と韓国からやはり伝統芸能を招いて国際芸術祭が行われました。日本にこんなすばらしいものがあつたのだと私も大変感動したのですけれども、そういう伝統的なものを世界にぜひアピールしてはどうかというのがこのアイデアです。

2つ目の枠組みは「クリエイティブ・フロント東京/日本」と名付けたのですけれども、日本から新しい芸術を発信していこうというものです。ロンドンと同じように世界中のアーティスト、あるいはアジアのアーティストに門戸を開いて、日本が彼らの芸術活動のために必要な場所であったり、チャンスであったり、資金を提供して、それを世界に発信する。そういうことができないかというのがこのアイデアです。

わかりやすく言うと、「アーティストの夢が実現できる都市『東京』、世界の芸術を牽引する国『日本』」をオリンピックのときに実現できないかなと思います。

東京は世界中から一流のオーケストラが毎日のようにやってきて、すばらしい美術作品、

絵画等も展示されておりますけれども、では、日本が世界に発信している芸術はどれぐらいあるかという、必ずしもそんなに多くない。ですので、日本から世界の文化を創造し、発信していこうというアイデアです。

実はこれも全国展開できる素地があります。

「アーティスト・イン・レジデンス」というのがございまして、国内外からアーティストを招いて一定期間滞在していただいて、作品をつくる機会を提供する。そういう場所や施設というのが全国に広がっています。国際交流基金によれば大体50カ所ぐらいということですが、今はもっと増えていると思います。

ですので、世界中のアーティストにオリンピックのときに日本に来てもらい、全国各地に滞在してもらい、とりわけ温泉のある場所というのが狙い目だと思うのですけれども、温泉を楽しんでもらいながら作品をつくってもらい、それを日本で発表し、その後、世界に巡回する。そういうことが日本からできないかというのがこのアイデアです。

3番目は、ちょっとべたなタイトルなのですがすけれども「日本人は皆アーティストだ！」というアイデアです。

ロンドンオリンピックのときには「World City Cultural Summit」という国際会議が開かれました。それはロンドン市長の肝いりで、これからの都市政策には文化が重要だということアピールしようということで行われたんですが、それにあわせて世界の大都市の文化特性を比較した研究レポートが発表されました。

東京もそれに参加して、東京の文化特性はこのスライドに列記してあるようなことなのですがすけれども、できるだけデータで客観的に比較しようということで様々なデータが集められました。

その中で、世界中の方々が驚いた東京のデータをいくつか紹介します。東京都内の一般家庭には何と83万台のピアノがあるというのです。それから、お花やお茶を日常楽しんでいる人は46万人。そして、アマチュアのダンススクールの数は748件。これは国際比較ができたのですけれども、東京は断トツ1位でした。そして、新聞の発行部数540万部、これも恐らく世界一ではないかと思うのですけれども、主要紙には俳句コーナーがあって、毎日おびただしい数の俳句が投稿されています。

つまり海外の方々は、日本では、アーティストがつくった芸術作品を劇場や美術館で鑑賞するだけではなくて、普通の人々が日常的に芸術活動をやっているということにすごく驚かれたのです。

むしろ海外の文化政策では、そういうことをどうやって実現するかというので皆さん苦慮されていますので、日本はそんなことはとっくの昔にできているよということになって、それで皆さん大変驚かれました。ですので、その姿を世界中にアピールしたらどうかというのが3つ目のアイデアです。

そのための具体案を3つ考えてみました。

1つ目が「鳴り響け1,000万台のピアノ」というものです。都内に83万台、しかも一般家

庭だけでそれぐらいあるということは、恐らく日本中にピアノは1,000万台ぐらいはあるだろうと。ですから、先ほどロンドンのベルを鳴らすプロジェクトを紹介しましたがけれども、それにヒントを得て、日本では1,000万台のピアノを鳴らしたらどうかと。学校にもたくさんピアノがありますから、それも子供たちが一生懸命練習して、開会式でテーマソングを1,000万台のピアノで弾く。これはおじいちゃん、おばあちゃんでも結構ですし、障害のある方でも参加できる。そういうことを今から準備してやっていったらどうかというのが1つ目のアイデアです。

2つ目、先ほど第九の音楽が流れておりましたけれども、実は2020年はベートーヴェンの生誕250年に当たります。ですので、今度はパラリンピックの閉会式に「歓喜の歌」を、日本全国で250万人ぐらい参加して歌うというのをやったらどうか。たしか大阪では1万人の第九とかあると思いますので、これも十分実現可能かと。

もう一つは盆踊り。これは「日本縦断BON Dance!」とあえてアルファベットで書いているのですが、今、盆踊りに取り組む若いアーティストは珍しくありません。例えば先ほど御紹介した大友良英さんは福島の御出身で、震災復興のプロジェクトで福島の盆踊りというのを新しく展開されています。ですから、若いアーティストが盆踊りを復活させたり、新たにつくるという動きが今あちこちにございます。

お盆のシーズンというのは、ちょうどオリンピックとパラリンピックのインターバルに当たります。ですので、そのすき間のときに全国で盆踊りを展開する。これはもう老若男女誰でも参加できますので、そういう姿も世界にアピールしてはどうかというのがこのアイデアです。

そのことを通じて、冒頭のビジョンのところでお話ししましたがけれども、高齢者、障害者、老若男女の参加によって「老いても文化で豊かに元気な国、日本」をぜひオリンピックのときに全国から世界に発信できないかなと思っています。

最後になりますけれども、きょうは地方自治体の東京事務所の方も大勢お見えになっていると伺っておりますので、今度の五輪をぜひ東京だけの催し物に終わらせないで、文化に投資をして文化プログラムで全国が活気づいたらいいなと思っています。

とりとめのない話になりましたけれども、私の話はこれで終わりたいと思います。

どうもありがとうございました。（拍手）

○司会 吉本様、どうもありがとうございました。

続きまして、当研究会の委員で、近畿日本ツーリスト株式会社地域誘客事業部長兼スポーツ事業部長の青木淑浩様より、お願いいたします。「メガスポーツイベントとツーリズム」というタイトルでございます。

○青木委員 おはようございます。今、紹介いただきました近畿日本ツーリストの青木でございます。よろしく申し上げます。

ちょっと簡単に、自己紹介をしますと、私は今、ここに書いておるとおり、地域誘客事業部という地域振興を観光の側面からお手伝いしようというような事業部におります。



というような考え方です。基本的にこういう考え方に基づいた形で、私どもはスポーツをコンテンツとした地域の活性化に取り組んできております。

それでは、オリンピック・パラリンピックに至ってはどんなことが具体的にあるのでしょうかということが次でございます。

経済的効果の場合、今、外国の観光客がいっぱい来てお金を落としてくれますね。あるいはこれから東京、日本が注目されるので、グローバル会議といったものが多分増えてくるでしょう。2016年にはサミットもあるようですが、あとは宿泊だ、ツーリズムだ、そういったところでいろいろな支出が直接的に出てまいります。

次に、社会的効果です。

先ほどロンドンのお話がありまして、後にもちょっと出てまいります。スポーツ、身体運動がどんどん普及されてくる。若い人から御年配の方まで健康増進、いわゆる健康寿命の延伸。また、パラリンピックのパラリンピアンを見ることによるバリアフリー、これはハードだけではなくて精神的なソフトの面、こういったものでございます。

あとは、いろいろなPR活動。それから、今はやっておりますが、各地域で事前合宿を受け入れる。こういった交流、青少年の育成、グローバル教育、活性化、ボランティアの経験、ボランティア組織、こういったものが社会的効果で挙げられるでしょう。

これは非常に見にくくて申しわけございません。日韓のワールドカップが2002年に行われました。それが終わった後、キャンプを受け入れた19の市町村の担当者レベルに対して、この下の出典の方々が行ったヒアリングでございます。

かといって、この各市町村がそうだったという確たることではないのですが、一つ参考事例といたしまして、終わった後、先ほど出ました社会的効果を8項目質問しました。国際交流的によかったですか、人材の育成になりましたか、地域のアイデンティティーは醸成されましたか、地域間の交流が進みましたか、スポーツの振興は図られましたか、このようなことを8項目質問しました。

◎、○、△、×と。◎は「とても有意義だった」、○は「とてもよかった」、△は「普通」、×は「そうでもなかった」、こんな回答をした表をこんな形でまとめたところがございます。

当然ながら、青っぽい面積が広ければ広いほどその効果が高いということになるわけですが、残念ながら、今言った◎、○、△、×のうち×と△がない自治体は、19の市町村の中で3つしかございませんでした。中津江村、十日町、平塚市の3つだけでした。あとはどこかに×があったり、△があったりしました。

これはキャンプ地を受け入れた19の市町村に対して、終わった後にヒアリングしたデータです。つまり事前キャンプだけを受け入れたのでは、地域の活性化というのはどののとクエスチョンマークがついたという資料でございます。

続きまして、長野、日韓、ロンドンといった中で、日本で行われた大きなイベントの中で、どんなことがレガシーと申しますか、今、継続で残っているかという事例を一つずつ

挙げたいと思います。

まず、長野オリンピックでございますが、もちろん「一校一国運動」という、これは大変有名な運動でございます。1つの学校で、ある1つの国を勉強して交流を深めていこうという運動でございます。これが後ほど、この長野をきっかけに他のオリンピックでも「The One School One Country」という名前で引き継がれております。これは大変日本が誇るレガシーの一つだと思います。これを導入するには大変苦勞されたと同っておりますが、これが長野の一つの事例でございます。

日韓のときでございますが、先ほど申した3つの市町村のうちの新潟県の十日町がクロアチアのチームのキャンプを受け入れました。

なぜここを取り上げたかと申しますと、クロアチアのキャンプを受け入れた後、十日町はそんなに大きくない町でございますが、スポーツを含めて自分が持っている資源、身の丈に合ったもので町の活性化をしていこうということで、今はスポーツコミッションの設立までこぎつけ、いろいろなことをやられております。

下にありますように「スポーツやスポーツに関連するイベントを開催する事による社会効果を活用した町・地域づくりを展開していくためのプラットフォーム」という位置づけをとっております。

いまだにクロアチアとの交流が続いております。この間のブラジルのワールドカップのときには、クロアチア戦で、十日町でパブリックビューイングが行われました。「クロアチアピッチ」と呼ばれているのは、実際にキャンプに来たチームが使ったピッチです。

十日町は、ジャパン・クロアチアフレンドシップハウスといったものを建てて、もちろんスポーツ合宿の受け入れ、スポーツのいろいろな振興も含めながら、クロアチアを含めて経済との交流をしている。今、クロアチアでは、日本という十日町と言われるぐらいにクロアチアでは有名になっているという事例でございます。

次に、ロンドンではどんなことがありましたかということで、ロンドンの東側にエセックスカウンティというところがございます。ちょうど開会式のメインスタジアムのある地域でございますが、ここで今レガシーとして残っているのはこんなことだろうということが、昨年、自治体国際化協会のロンドン事務所というところでこの方を招いて講演を受けた抜粋でございます。

もちろん先ほど吉本先生からあった文化プログラムもそうですが、それ以外にオリンピックの教育プログラムとして「Get Set Education Programme」というのがございます。これはオリンピック教育を受けるときに、今、ネット上で英国全土のいろいろな小学校、中学校の先生が全部アクセスできて、それを取り込んで未だに続いているというプログラムで、これは学生のグローバル教育、人材教育の一環だと思います。

「Team Essex アンバサダー」という将来のアスリート・競技者の発掘であったりとか、「Journey to the Podium」というのは表彰台への道のりみたいな意味なのですが、いろいろな競技者の育成をするためにいろいろなお金をつけたとか、あるいはスポーツの振興が

図られました。終わった後、月1回30分以上何かしらの運動をする方が約1,792万人になりましたというようなデータです。

最後が「パラリンピアン魅力向上」です。ロンドンオリンピック・パラリンピック開催前にロンドンの方を含めた英国全土にいろいろな質問をしたそうです。

今こちらの会場にいる方も多分そうだと思いますが、過去のオリンピックの代表選手を5人、6人挙げてくださいと言ったら多分挙がると思います。室伏選手だ、高橋尚子選手だ、北島選手だと。パラリンピアンを5人挙げてください。多分挙がらないと思います。

実はイギリスでもそうでした。これではまずいねということで、いろいろ工夫してパラリンピアンを向上を図りました。御本人のSNSなどでのPRもしかりですが、企業が積極的にコマーシャルに起用する。あるいはいろいろな大会をいろいろな方が出席して見ることができるチャンスを増やしていく。こういったことによって、2012年のロンドンオリンピック・パラリンピックが終わった後には、たくさんの方がパラリンピックの選手の名前を言えるようになった。このような「パラリンピアン＝クール」というイメージ戦略がロンドンでは成功したと言われております。

では、東京大会はどのような位置づけなのかなということで、国がいろいろなことを言っております。

「ホストシティ・タウン構想」は後ほど説明します。

復興オリンピックである。日本全体でオールジャパン体制でいろいろなことをやってみましょう。この秋、スポーツ庁の設置がございまして、2016年だと思いますが「スポーツ文化ダボス会議」というのも行われようとしております。そして、五輪と連動する先ほどの文化プログラムの発信、地域の発展というようなものが掲げられております。

前回の1964年の東京オリンピックと今回の2020年のオリンピックで1つ大きな違いがございまして。

これは国立社会保障・人口問題研究所の「日本の将来推計人口」のグラフでございまして、一番上が生産年齢人口、真ん中が高齢人口、一番下が年少人口です。これはあくまでも予想値でございまして、このようなグラフであります。

つまり1964年のときと2020年のときを比べると、総人口は9,718万人から1億2,400万人になるだろう。高齢化率が6.2%から29%、生産年齢人口は15歳～60歳の間ですが、これは全体の人口に占める割合は1964年は68%ありました。ところが、2020年は59%です。これを比較すると、要は、1964年のときには20歳以下の方は約172万人おられた。毎年10%人口増加して活気あふれる社会であった。2020年は生産年齢人口が500万人以上います。少子高齢化で人口減少になる。このような中で2020年のオリンピックの開催が決定しました。

では、オリンピックを契機にどのようなことをしていこうかということで、1964年と2020年のときに、このようなものがありますが、日本全国の自治体あるいは地域の活性化を図る大きなチャンスとして捉えて、これを実行していく必要があるのだろうと。そうしない

と、何のために何千億というお金を使ってオリンピックを開催するのかというようなことになるかと思えます。

私どもは観光事業者の立場で、インバウンドの御質問も結構来ているものですから、今回はインバウンドについて若干御説明を申し上げたいと思えます。

「観光立国 アクションプログラム」というのが、昨年、観光庁を中心に国で発表されました。要は2020年のオリンピック・パラリンピックを見据えて、2,000万人の外国の観光客を呼びましょと。インバウンドの飛躍的取り組み、ビザの緩和、世界に通用する魅力ある観光地域づくり、外国人旅行者の受け入れ環境整備、MICEの誘致云々とあります。

これはインバウンドの数値の推移なのですが、2013年に初めて年間1,000万人を年間で突破をいたしました。観光庁として悲願でありました、1,000万、1,000万と。やっと2013年に1,000万人を超えました。昨年1,300万人を超えました。2013年の7月～9月、2014年の7月～9月の同時期の外国の方が日本に来てどの県に訪問したかという訪問率の推移でございます。

2013年に1,000万人、2014年に1,300万人を超えるお客さんが来ました。赤いところが1%以上増えているところです。見ていると千葉県、東京都、神奈川、静岡、愛知、京都、大阪、広島、沖縄しか1%以上増えていないのです。残りはマイナス2.2%とか、これは7～9月だけの3カ月のデータですから、年間を通すと若干ぶれてまいりますけれども、夏休みを例に挙げております。

減っているところがあるわけです。増えても0.数%という微増。これがやはり大きな一つの問題になってまいります。いかに外国の方が地域・地方に旅行に行っていたか。そのためにどういう仕組み、仕掛けをしていくかということが非常に重要になってくると思えます。

過去のオリンピックの中で、いろいろなオリンピックがありましたけれども、特にロンドン、シドニー、バルセロナの3つの大会を例にとっておりますが、オリンピックを開催した翌年、少し外国の観光客が落ちてきたりするのですが、トータル的には上がっているというデータが残っております。

特にロンドンの場合には2012年よりも2013年のほうが増えています。必ず翌年は若干落ちるのですが、ロンドンの場合はキープか、それより少しアップしている。ほかは若干落ちても、そのうちどんどん上がっていったというのが現状でございます。ですので、これをいかに2020年の東京オリンピックのときに持ってくるかということだろうと思えます。

2020年までのスケジュールとして、東アジア地区で行われる代表的な国際スポーツ大会でございます。本年は北京で世界陸上があり、2019年にはラグビーの世界カップが日本で開かれ、2020年にオリンピックがあつて、2021年には関西でワールドマスターズゲームがあります。

2020年のオリンピックに向かって、多分、文化交流プログラムが2016年のリオが終わっ

た後からスタートしてまいります。今、事前合宿の調査・受け入れ準備、聖火リレーがあり、1年前にはテストイベントがあって、いろいろな競技のアジアの最終予選が日本各地で行われると思います。

それぞれの文化交流プログラムは、こうやったら地域活性化になるね、あるいは事前合宿を受け入れたら何かPRできるよねと、今は一つ一つが点になっていると思いますが、これを面にして捉えていく必要があると理解しております。

次に説明します「ホストシティ・タウン構想」という、今、国が進めようとしている構想がございます。1つの地域で受け入れる国を決めて、その国との交流を2020年の前から、例えば教育交流、スポーツ交流、文化交流、パラリンピックに関する交流、経済交流、こういったものをその国とやっていって、2020年を迎えて2021年以降のいろいろなまちづくりに生かしていこうという構想でございます。これは文化プログラムや事前合宿といった点を面に変えていく一つの大きな構想でございます。

その一つの地域活性化ということで、今「ホストシティ・タウン構想」はぜひ活用すべき事例だと私は思っております。その中に事前合宿があり、文化プログラムあり、ひょっとしたら自分の地域に聖火リレーが通れば、そういったものの地域活性化を活用していくでしょうと。

レガシーについては、よく「課題解決」と言われておりますが、高齢化が進み人口が減ってきます。そうすると、交流人口をふやさなければいけません。これは日本国内、海外問わず、交流人口をふやしていく。高齢者に生きがいを与えなければいけない。アクティブシニアをどんどんふやしていく。つまり病院にかかる高齢者を少なくしていく。

「健康・医療」では健康寿命の延伸、「人材育成」では多様性を受け入れるためのボランティア並びにグローバル人材の育成、こういったものがオリンピックを通じて行われる大きな項目だと考えております。

きょうは自治体の方もたくさん来ておられると思いますが、来年度中に地方版の総合戦略の策定をしなければならないと伺っております。人口減にならないように、あるいは定住人口をふやすために、少子高齢化率を少しでも改善するために、国がここ5年間の総合戦略案を策定しました。それに基づいて来年度中に地方版の総合戦略が策定されます。

ちょうどこれから5年間というターム、オリンピックまでの時期は、今申し上げましたとおり、いろいろなことが前もってやってまいります、それをぜひうまく取り込んでいただいて総合戦略地方版の中のエッセンスにつけ加えられたらいかかと思えます。

これは3年ごとにフェーズを区切っております。一般の企業ですと3年ごとに中期経営計画というものが策定されます。それと同じように、2015～2017年までの3年間、2018～2020年までの大会での3年間、2021～2023年までは「BEYOND」の3年間、こういったことを長期スパンで捉えていただいて、オリンピックはあくまでも通過点であって、その先の2021年以降に自分たちのエリア・地域がどう変わっていくのだろうか、あるいはどう変えたいのだろうか。

今、いろいろな問題があると思いますが、その問題の解決のきっかけにさせていただきたい。あるいはそれを解決するために、一つでもいいからこれについて解決しよう。少子高齢化で高齢化率がどんどん進んでいるのは仕方ない。でも、医療費をどうにか削減したい。そのためにいろいろな身体運動をして、元気なお年寄りをどんどんつくって行って自治に参画をしていただく。こういったことを、スポーツを使って活性化していく。

あるいはパラリンピアン障害者スポーツの受け入れ。パラリンピアンはアスリートですので、毎日大変なトレーニングを積んでおります。一般の障害を持っている方がスポーツをする機会が今はなかなかないと思います。

体育館で車椅子にお乗りの方がバスケットボールを楽しんでいる風景は、一般にはほとんど見られないと思います。なぜか。車椅子で体育館の床が傷ついたりするのが嫌だということで、使えない体育館がいっぱいあります。これを2020年までにはなくしていかなければいけないと感じます。

健常者の方と一緒にやるスポーツは、例えばゴールボールというスポーツがあります。あるいはアンブティサッカーというサッカーがあります。ゴールボールの場合には健常者も一緒になって試合ができます。

特に、障害者スポーツによる健常者との交流が一番進むのは、小学校5年生、6年生、中学3年までの期間と一緒にスポーツをすると、障害者への理解というのが格段に早くなるそうです。一番吸収がいいそうです。

9月の中旬にパラリンピックが終わります。9月1日からは普通の学校は2学期が始まります。先ほどの「ホストシティ・タウン構想」である程度地域を決めていただければ、その地域や国で出場したパラリンピアンを学校に呼んでいただいて、ぜひ交流を図っていただいて、もしメダルを取っているパラリンピアンだったら、みんなでたたえて一緒にスポーツをしていただく。こういったこと一つとっても、一番初めに申し上げた社会的効果が持続できる、そういうスポーツ振興にかかわる地域活性化につながっていくのではないかと思います。

3つのフェーズがありますけれども、こういったものをぜひ地域の活性化、地方版総合戦略の中に少しでもエッセンスとして入れていただいて、オリンピック・パラリンピックをうまく活用して、いろいろなスポーツのコンテンツを使った地域の活性化につなげていただきたいと思います。

逆に、今後、私どももそういうお手伝いをしていきたいと思っております。

本日は以上でございます。ありがとうございました。（拍手）

○司会 青木様、どうもありがとうございました。

それでは、ここで一旦休憩とさせていただきます。

パネルディスカッションは11時10分より開始させていただきますので、お時間までにお席にお戻りください。

(休 憩)

○司会 それでは、時間になりましたので、再開いたします。

これからパネルディスカッションに入らせていただきますけれども、進行につきましては、当研究会の委員で「doppo」代表、伝統工芸産地プロデューサーであります関口暁子様をお願いいたします。

それでは、関口様、よろしくをお願いいたします。

○関口委員 それでは、これからパネルディスカッションの進行を務めさせていただきます関口暁子と申します。どうぞよろしくをお願いいたします。

まず、パネラーの皆様の御紹介から簡単にさせていただきます。

私の隣から、株式会社ぐるなびの創業者で現代表取締役会長、滝久雄様です。よろしく申し上げます。(拍手)

滝会長は、当研究会の座長を務めていただいております。

その隣、基調講演をしていただきました青木淑浩様です。(拍手)

その隣、当研究会委員、日本の次世代リーダー養成塾、理事兼事務局長の加藤暁子様です。よろしくをお願いいたします。(拍手)

その隣、同じく当研究会の委員で世田谷記念病院副院長、回復期リハビリテーションセンター長の酒向正春先生です。よろしく申し上げます。(拍手)

その隣、当研究会の委員、ノンフィクション作家の野地秩嘉様です。よろしくをお願いいたします。(拍手)

最後になりますが、基調講演をしていただきました吉本光宏様です。(拍手)

これからはこのメンバーで進めさせていただきます。

本日は、皆さんも専門家でいらっしゃいますので「オリンピック・パラリンピックを契機とした地域活性化」というテーマにつきまして、専門分野の視点からそれぞれお話をいただきたいと思います。

吉本様、青木様は先ほど基調講演をいただきましたので、滝会長のほうからよろしくをお願いいたします。

○滝座長 皆さん、おはようございます。御紹介いただきました滝でございます。

今、関口さんから専門家という話がありましたけれども、座長だけが専門家ではなくて実務家でございます。きょうは5分間ということで(お話の時間が)限られております。

私も2020年のオリンピックが決まったとき、皆さんと同じように、本当にこれで日本がもしかしたらもう一遍何とか頑張れるラストチャンスをもたらったかなと思いました。私は、昭和39年の最初の東京オリンピックをちょうどサラリーマンになって2年目で体験しているものですから、なおさらでした。

私どもは食文化をテーマに仕事をしているものですから、文化には非常に縁が深いです。私自身もパブリックアートなどは40年やっておりますし、そんなことで、きょうは私ども

が取り組んでいる中で最近ちょっと目立つものを持ってまいりましたので、私を知っていただくきっかけ、あるいはぐるなびを知っていただくきっかけみたいになればなと思って、限られた5分以内で御案内いたしたいと思います。

それでは、お願いします。

パブリックアートは、あまり皆さんは聞きなれないかもしれませんが、51年前、アンドレ・マルローというフランスの文化大臣が言い出した、公共工事費の1%を芸術・文化に使いなさいということです。これをやっていないのは日本だけです。韓国も台湾も数年前に始めていますし、欧米社会は51年前です。アメリカはものすごい優遇税制がありまして、大変な結果を出しています。

私どもがパブリックアートのことを言い出して40年近く啓蒙といたしますか、私ども自身が入り入れて、また、日本を代表する作家を口説いて、また、パブリックな場所であれば意味がないですから、JRの代表に鉄道等のパブリックアートの持ち主に認可をとる。一番大きいものでは、安全の認可をとるところが難しい。大体3年から5年かかるわけですが、しかし、この作品が508個目です。

結果、当日の夕刊に読売が日本交通文化協会について書いてくれましたけれども、大友克洋さんの初めての陶板レリーフ作品です。

隈研吾さんもフランスでの建築の世界審査会をやめてこちらに来られたり、国土交通省の本田さんも自分が航空局長時代につくった仙台空港、しかも大震災の2日前にこの空港ビルで防災訓練をして、1,700人がこのビルの3階に逃げて助かったのです。思い出深いので、来られました。

彼が造形をしたものだそうですが、『AKIRA』の大ファンで、7カ月、彼はほとんど夜も寝ないで造形をしていました。3月12日にこれが完成したのですけれども、おやじさんの希望で12日にしたと。

13日が世界防災大会で50カ国の人が集まったわけです。安倍首相も行ったわけですが、パン事務総長は前日から来ていまして、ちょうどこれを知りまして、もう大変ほれ込んで、日本の今の文化・芸術として世界に発信するのはこれにしようとなんかお決めになられて、グループは裏千家のお茶にしようということで、私もセレモニーが終わって帰ったのですが、急遽また呼び出されまして説明させられました。でも、大変うれしい出来事でした。

これが原画です。この陶板レリーフは、30センチぐらいのたたら打ちというか、粘土をこうやって造形していくのですね。その後、これを500ぐらいに小刻みに切って、その裏を削るという大変な作業です。

私どものアトリエも36年たっていますが、隈さんの設計です。隈さんは私の小学校の後輩で、まだちょっと有名になる直前でした。

これはちょうど500個目を福島に提供したものです。去年の2月15日、堀文子先生です。堀さんは、人間が地球上でちょっといばり過ぎていると。もっとトータルに生物に公平で

なければいけないと常々言っている先生ですけれども、非常に楽しい作品です。この絵は東京駅の1号の福沢一郎から500個を超えています。

これは大体こういう、今、ぐるなびは私のグループですから、一緒に地元の食材、特に福島も大変にぎわいました。仙台は3,000の食材があるのですが、人家に持ち込んで地元の主婦が来て、おやじさんと一緒に手伝っていました。

これは「ジャパン・レストラン・ウィーク」です。おいしい店といろいろ約束して、年に2回だけ決められた予算で食べられるようにという運動を始めていまして、結構盛り上がって、このような感じで全国につながりつつあるのですが、たくさん来ています。

ぐるなびは2万人のシェフのコミュニティーを持っているということもありまして、生産者を全部つなげているのですが、京都の食材を京都出身のシェフたちに新しいメニューを開発させるという食材フェアです。これも非常に盛り上がり、ネットワーク化しつつあります。

私は、オリンピック以降、世界の食文化を持った、あるいはいろいろな歴史的な文化を持った、あるいはいろいろなお祭りを持った日本、あるいは地元の人が常に情報を見られる時代にならなければいけないということで、地元で500人か600人ぐらいの恩師が実際に後ろ盾になりながらも、自分の顔を出して実名で情報を出すというこのサイトを始めているのですが、これはなかなか皆さんに利用していただいて盛り上がってきています。

このような感じでどんどん数が増えていまして、トータルに京都のいろいろなお店で、特に今、京都に来ている旅行者に来ていただきたい、いろいろな形のことに関してもやりたいということです。

京都の次は新潟ということです。このような感じで皆さんの手が挙がって、やはりみんながやらないと。リピーターの命は現発だということです。現地発の情報がなければ、本当の意味の日本のすばらしさをリピーターにつなげられないのではないかなというようなことでございます。

私どももOEMで観光庁のお手伝いをしているのですけれども、10年の結果の中で1,500万履歴ぐらいあるので、それを分析すると、やはりリピーターの外国人訪日客にとっては詳細情報がないとだめなのです。メニューというものは翻訳できないのです。それを私どもは、日本語でシェフが自分のメニューを選んで、それが自分のメニューになり、それが自動的に6カ国語に翻訳されるという訪日外国人用ぐるなび辞典をつくった。これはなかなか今好評です。体験プランみたいなものも、今、お手伝いしているところです。

これを最後にちょっとお話ししたいのですけれども、究極のところ、やはり現地に行って、タイに行って、あるいはマレーシアに行って、あるいはフランスに行って日本の情報を出し続ける。またはタイに行って、タイの日本の調理人、あるいは日本の経営者のお店と連携した中で、コンソーシアムで徹底的に日本のよさをPRしていくことが必要ではないかということをして2年前から始めて、先にリアルな場としては、隈さんと小山薫堂さんが手

伝って、結構人気のリアルな紹介コーナーに外国人がどんどん相談に来るような構成になっています。

このようなことをございまして、紹介のみで終わりましたけれども、どうぞよろしくお願ひします。（拍手）

○関口委員 滝様、ありがとうございました。

日本は大変すばらしい食文化を持っているということで、企業活動が地域の活性化につながるというすばらしい事例を御紹介いただきました。

次に、加藤委員のほうから事例をお願いいたします。

○加藤委員 皆さん、こんにちは。加藤暁子と申します。

「オリンピックと青少年交流」ということで、私が現在、福岡の宗像市というところで全国の高校生を集めてサマースクールを、今年で12回目になるのですが、地方自治体とスクラムを組んでやるというような事例を紹介しながら、では、次のオリンピックで何ができるのかという御提案をさせていただきたいと思ひます。

「日本の次世代リーダー養成塾」というのは、2002年に地方分権研究会というのが慶応大学のグローバルセキュリティ研究所というところで始まりまして、そこに当時の経団連の会長の奥田碩さんだとか、当時は日本の中央政府がまだなかなか構造改革が行われていないというようなことで、地方からどんどん新しいアイデアを出していろいろ実行しているのではないかとということで、産官学でいろいろな取り組みが始まりました。

その中の一つに教育があつて、例えば株式会社で中高一貫の学校をつくったらどうかと。昨今、日本人が内向きになっているから、外に出て行くような人をどんどん出そうではないかというようなことで提言をいただいたのですが、学校となると1カ所に決まってしまうということで、では、サマースクールだったら、地方の子たちがどこかに集まって、そしてまた、その子たちが地方に戻つてその地域で青少年の目線で改革ができるのではないか、いろいろな試みや取り組みができるのではないかとということでサマースクールを始めました。

現在まで毎年170人の高校生1～3年生まで、全国から福岡に集まりましてサマースクールをやっています。

去年からは、特に国レベルで日本と中国、韓国の関係がなかなかよくないと。こうなると、若い人からどんどん交流をしていかないとうまくいなくなってしまうのではないかという懸念もございまして、中国、韓国、モンゴル、タイ、マレーシア、インドネシアという国々から、17人とまだ少ないのですけれども、とりわけ少しは日本語ができる子たちを無償で招待いたしました。

現在、地方自治体とタイアップしていると申し上げましたけれども、北海道、青森、岩手、静岡、岐阜、和歌山、福岡、佐賀と、大体その県から10人ないし20人ずつ選んでいただきまして、そのほかに一般枠と申して、20数都道府県からこちらの事務局のほうでもまた選抜しまして、大体毎年26～27の都道府県の子供たちが170人集まっているということで、

これまでに11回行われていますが、1,800人余りの卒業生が出て、今、社会で活躍しています。

次のところを見ていただきたいのですが、2週間何をやっているかというところ、このようにマレーシアの元首相だとか、それ以外に例えば柔道の山下泰裕さんだとか、ぐるなびの滝会長とか、経済界だったりスポーツ界だったり、芸術家だったり、例えば学者だったら宗教学者の山折哲雄先生とか、いろいろな方々に25人ほどいらしていただいて授業をやって、その後、質疑応答。そして、クラス担任ということで、これはディスカッションで、クラスごとに分かれまして、協賛企業から担任の先生たちを派遣していただくというようなことでやっています。

今はこれがメインイベントみたいになっているのですが、「アジア・ハイスクール・サミット」といって、先ほど言ったようなアジアの高校生並びに日本人の中で、アジアの中でどんなことを一緒にやったら戦争もなくなるし、偏見もなくなるだろうかということで、高校生の目線でいろいろなことをしてもらいました。

一つの例ですけれども、中高一貫の学校をどこかにつくって、これを持ち回り式にしてアジアで一緒に学ぶような学校をつくったらどうかとか、日中韓の首相にどこかの無人島に行ってもらって、誰もいない中で1週間とか2週間とかお互いにずっと話していい関係をつくったらどうかとか、そういう過激な意見も出たりしましたがけれども、そのようなことをやって2週間終わった後に発表したりしています。

これは卒業生がこれだけいるということで、その次です。

そのようなことをやっている私の立場から言って、では、2020年に何ができるかということを考えてみました。

まず、日本がものすごく誇れるものとして鉄道というものがあると思います。今、水戸岡鋭治さんが代表するような「ななつぼし」だとか、これは「ゆふいんの森号」といって湯布院に行く高原列車ですけれども、こういう観光列車がいっぱいあります。ですから、臨時列車を走らせて、この観光列車の中を使ってこの中でディスカッションをするのです。

観光列車ですから鈍行列車みたいなものなので、いろいろな地域に止まるではないですか。例えば湯布院町とか小布施町とか、どこでもいいのですけれども、そういうところに止まったら、そこで町長以下町の人たちがみんな歓迎して、ホームステイをして、そこにある観光地を訪れ、学校を訪れ、そこでまたディスカッションをするのです。

世界中の子供たちが、1人の外国人に1人の日本人の高校生と一緒にペアになって動いていくのです。地域を決めて日本中、例えば北海道とか、東北とか九州とか、いろいろなところでこれをずっとそれをやり続けて、1カ月ぐらいやるのです。そして、こういう形でどこか1カ所に集まって、最終的に「ワールド・ハイスクール・サミット」というのをやりまして、そこで提言を出していく。

例えばこれのテーマなのですけれども、オリンピック精神に基づいて、戦争をなくすためにはどうしたらいいか、具体的に高校生の目線で提言を出してもらおう。それを最終的に

は首相に手渡してもらおう。それから、各国の大使が東京にはいらっしやいますから、それぞれの国の子供たちが大使に渡すのです。そして、大使が今度は本国の大統領なり、首相に渡して、今度は帰ったらそれを実行させるということが大事なのです。

やはり何事もやりっ放しはよくないので、出た案をそれぞれの国に帰って、戦争をなくすためにそれぞれの国の子供たちが主体的になってやってもらおうというようなことを、オリンピックの年、もしくはその前年あたりにプレ文化青少年交流のイベントとしてやったらどうかというのが私の提案です。

以上です。（拍手）

○関口委員 加藤委員、どうもありがとうございました。

次世代の若者を育てるという視点から、また、鉄道は日本の誇れる技術でもありますけれども、こういった接点をつなげて御発表いただきました。

次に、酒向委員のほうから御発表をお願いいたします。

○酒向委員 おはようございます。世田谷記念病院の酒向と申します。

私は、オリンピック・パラリンピックを目指し、超高齢化社会の中で、オリンピック・パラリンピックを支えることができるようなモデル都市を実現していかなければいけないと思っています。それを「健康医療福祉都市構想」と呼んでおります。

日本の医療というのは、予防があって、ある日発症しますと、救急医療になります。よくなると慢性期でうちに帰ります。しかし、障害が出るとリハビリが必要になって、その結果で、うちに帰れるか施設に入るか。

ただ、高齢者の方の場合は、障害が出なくても機能や能力が落ちて閉じこもって寝たきりになることがあります。そこで、人間力を引き出すために何が必要かと申しますと、救急では「廃用予防リハ」、回復期リハビリでは「攻めのリハ」、慢性期は「街（タウン）のリハ」です。

救急、回復期は病院です。しかし、慢性期は病院には頼れないわけです。55歳の方が発症すると、残りの25～30年間は慢性期です。そこにスポットライトが当たっていないという現状があります。

2013年5月13日、NHKが私たちの取り組みを「Professional～仕事の流儀～」という番組の第200回で放送しました。この番組でのNHKがつけた「攻めのリハビリ」という言葉が私たちの代名詞になっております。

では、超高齢化社会の基盤となる社会環境には何が必要か。これは人間力を回復すること、それを継続すること、社会貢献ができるようになること、プラス民族性、国民性を成長させること。このためには健康医療福祉（ソフト）が必要ということに加えて、やはり都市環境の整備（ハード）、それを使いこなす体制（ソフト）、プラス国民性の成長には教育と人材が必要です。

また、人間はもう既に80歳までは元気な時代に突入しています。つまり80歳までは、緩いビジネスによって脳も体もぼけさせないというシステムにしていかななくてははいけません。

プラス、困った方がいたときに助ける「協力」という文化、または個人が依存せず回復していく「自立」を北欧・ヨーロッパレベルに高めていかなければいけません。

そのためには健康医療福祉のためのまちづくりのトップ都市モデルが必要です。

私たちは2014年8月1日に推進ガイドラインを国土交通省から発信しました。実際に山手通りや二子玉川で大規模開発を進めております。

また、日本医師会と連携して、地域包括ケアシステムのトップモデルも都市レベルで進めるようにしています。

プラス大事なことは、こういったシステムをアジア諸国に発信する。アジアの超高齢化社会に対して我々のシステムを使っていただく。そういう研修センターをつくっていくということが世界貢献のために大事になると思います。

この「健康医療福祉都市構想」というのは、街の真ん中に超高齢化社会の医療連携を整備することで、医療の核はリハビリになります。プラス、街の真ん中に公的な歩道空間をつくって、そこでコミュニケーションを活性化します。ここを「ヘルシーロード」と呼びます。そこから、わかりやすい健康、医療、福祉の情報やサービスを発信して、さらに医療関連産業街を置きます。それを置くことによって、従来型のショッピング街と異なるビジネスの相乗的経済活性化が図れるという考え方です。

リハビリ医療による都市再生モデル、これは新しい文化と産業の創出です。つまりリハビリは大変だ、かわいそうということではなくて、「格好いい文化」にしてリハビリファッションを世界に発信していく必要があります。生活スタイル、アート、食文化、健康、工学テクノロジー、情報テクノロジーを進化し、これがパラリンピックにつながります。

プラス、復職就労支援、介護支援、子育て支援、シルバー支援、先ほどの情報サービスの発信、地域交流、定期イベントを行うこと、これがまちづくりになっていくわけです。

義足であっても、図に示すように格好いい義足では美しいリハファッションが可能であり、新しいスタイルを世界に発信することができるわけです。

そのためには、日本の中心、港区、日本橋、丸の内、またはオリンピック・パラリンピックの選手村などのモデルの街をつくって世界発信するということが大事になると思います。

このために私たちは、人口20万～30万の自治体をモデルとして、都市開発業者と連携して町なかでの社会参加、社会貢献、生活再生の実践を実現しようと、今、プランを進めております。

また、地域包括ケアシステムを町なかでその自治体丸ごと実践していきます。かつ外国人に対応できるリハビリ施設、プラス在宅で生活される方に関しては、その自治体において一生継続できる外来リハビリ体制をつくります。また、急性期・慢性期施設に対しても、このリハビリの指導・研修を進めます。

プラス、海外の医療者にこのシステムを研修して、自国で進めて頂く。それを実践していただくことによる世界貢献を成し遂げるモデル、これを国家戦略特区でオリンピック・

パラリンピックまでにつくり、ロックフェラー財団が認める世界100のレジリエンスシティに認められるように進めていく。これがやはり日本の大事なポイントではないかなと考えております。

どうもありがとうございました。（拍手）

○関口委員 酒向様、ありがとうございました。リハビリ、健康長寿国の先進国としての役割をこれから実践していこうという御発表でした。

次に、ノンフィクション作家の野地委員から、よろしく願いいたします。

○野地委員 よろしく申し上げます。

最初に、写真の説明ですけれども、左側がこの前の東京オリンピックで、日の丸の一番下のところがオリンピックのマークです。全体を合わせたのが「第2号ポスター」と言われている陸上競技をもとにつくったもので、亀倉雄策という、もう亡くなったのですけれども、私が取材した中では日本で一番怖いと言われたボスマみたいな人でした。

ここで一つ、下のほうに線が横に流れているのですけれども、私はずっとフィールドとトラックの分け目だと思っていたのですが、ものすごくよく見たら、足の上に線が乗っているのですけれども、これはフィルムで撮っているのが光が流れているのです。ということは、写真としては、実際、本当はデザイナーなら使わないのですけれども、この瞬間が余りにもよかったので亀倉雄策さんが使って、今でも戦後日本のポスターの中では最高傑作だと呼ばれているのですが、スイスのローザンヌにあるオリンピック博物館に行っても、確かにこのポスターが一番真ん中に飾ってあります。

私は「TOKYOオリンピック物語」という本を2011年1月に出したのですけれども、前の東京オリンピックのレガシーは何かというと、実は新幹線とかモノレールとか目に見えるものではなく、目に見えないシステムだと。

その一つはデザインで、もう一つがコンピュータの記録速報、それから、民間警備と記録映画と選手村の食事の話なのですが、デザインのレガシーというのは、今そこにある非常口という、ああいうのは「ピクトグラム」というのですが、あれをつくろうと言ったのがこの亀倉雄策氏で、それまでああいうものがないころは、この中で51年前のことを知っている人はそんなにいないかもしれないのですけれども「非常口」と書いてあったり、トイレに行っても人の形ではなくて、ちゃんと「便所」と書いてありました。私はまだ小学校1年生だったので、それを覚えています。

今日はその中から1つ、選手村の食事についてだけちょっと話をしようと思うのですが、この真ん中にいる人が村上信夫さんという方です。当時、帝国ホテルの新館、新館というのはどういう意味かということ、今の帝国ホテルというのは新しくできたもので、その前のものは明治村に行くところなのですけれども、フランク・ロイド・ライトがつくった大谷石の、何で帝国ホテルはこれをやめたのだというぐらい立派な建物なのですが、そこ以外の料理長をまだ40歳ぐらいの村上さんがやっていたのですけれども、実は彼のやった仕事が今後のオリンピックでも、パラリンピックでも、レガシーと地方活性の一番のヒントにな

ると思ったので、今日はそれだけちょっとお話しします。

この選手村が画期的だったのは、大体1万人に食事を1カ月ぐらいつくらなければいけないのですけれども、日本全国から300名の料理人、地方のコックさんとか、町場のコックさんを集めてやらせたのですが、画期的だったことが3つあって、1つは全部これをカフェテリアでやった。今、カフェテリアというとみんな何だと思うのですが、51年前は自分がお盆を持って料理を取ってくるというのは刑務所だけで、あとは、カフェテリアというのは何だという時代ですから、アメリカとかオーストラリアの選手はわかったけれども、日本とか他の国から来た人はカフェテリアがわからなかったということを初めてやった。

もう一つは、セントラルキッチンというものをつくって、それをどこにつくったかというところ、選手村のある代々木公園の中につくって、同じように3番目の画期的なことの冷凍食品をつくるための倉庫をつくって、冷凍倉庫から、これも日本で初めてつくった冷凍車でセントラルキッチンに運んで、例えば肉は解凍したり切ったり、レタスは刻んでサラダの用意をしたりということをはじめたのが全部村上さんなのです。

この3つは画期的なのですが、何が一番偉かったかということ、全部終わった後、村上さんというのは帝国ホテルの責任者ですが、来た300人のコックさん全員に帝国ホテルのレシピをみんな書いて渡したということです。

帝国ホテルのレシピというのは、10年勤めて独立したってもらえないようなものを全部地方のコックさんにあげたので、今でもたまに富山とか新潟に行くと、何でこんな田舎なのにここのお店はおいしいのだろうと思うようなところがあるのですが、このときに村上さんにレシピをもらったという料理人の人がいるのです。私は、これこそシステムだし、地方活性化だと思うのです。

というのは、ちょっとしたものでは地方活性化にはならず、自分が一番大切だと思っているものをただで人にあげる。次のオリンピックをやったときも、吉兆でも京味でもどこでもいいのですけれども、その人たちが選手村で何かやる。そのときに、自分が一番大切している和食のレシピを、コートジボアールとかガーナとか、どこかわからないですが、そこから来た人たちに全部あげる。これだけでも十分レガシーになるし、地方活性化になると思います。

この後は写真だけで。これは記録映画と、そちらが下書きです。

これで一応おしまいです。

ということで、あと詳しくは本に書いてありますので、よろしくお願ひします。(拍手)  
○関口委員 ありがとうございます。

本日、フォーラムの時間は大変短く限られておりますので、残念ながら会場の皆様との質疑応答の時間がございません。そのかわりといいますか、事前に御参加の際にアンケートを頂戴しております。そのアンケートに基づいて、各委員のほうに御回答という形でお返事をいただきたいと思いますと思っております。

先ほどの順番とは逆に、ただいま野地委員から前回のレガシーということでお話を伺いましたけれども、今回の2020年の東京オリンピックのレガシーはどういったものが考えられるでしょうかという御質問を非常に多くいただいております。

先ほど少しヒントをいただきましたけれども、2020年、これからの東京オリンピックはどういったレガシーが起こせるだろうかという点について、もう一度野地委員のほうからお願いいたします。

○野地委員 今度はすぐ終わります。

レガシーというのは、私はまたシステムだと思っているのですけれども、そのシステムをどうつくるかという話だけを簡単にしようかと思うのですが、この東京オリンピックの本を書くために、実は本ではなくて当時のニュースフィルムを随分見ていたのです。

ものすごくおもしろいなと思ったのは、これが東京オリンピックを支えてレガシーをつくったのだなということがありますが、例えばアインシュタインが戦前日本に来たときのニュースフィルムを見ていたら、1922年、アインシュタインは日本の来る船の中でノーベル賞を受賞したのです。ということは、当時、別に受賞していない人を日本に呼んでいるというのは、日本人の先見性と言うべきか、好奇心と言うべきか。

今日は、私たちは5分ずつですけれども、当時のアインシュタインというのは、講演で1人で6時間しゃべるらしいのです。当時、相対性原理をわかっている人は世界に15人しかいなかった。ヨーロッパで講演しても誰も行かないし、行ってもわからないから、6時間も時間がないしで行かなかったらしいのですが、そのニュースフィルムを見ているとおもしろいのですけれども、日本に来たときは、ねんねこぼんてんみたいなものをかぶったおばさんと言うと失礼なのですが、おかみさんが赤ん坊を抱いてアインシュタインの講演を聞いているのです。しかも1カ所ではなくて、アインシュタインは8回講演をやって、1万4,000人来たというのです。そんな国は日本以外にないだろうと思いつつ見ていて、この好奇心。

アインシュタインの例だけではなくて、例えば終戦後の第一生命ビルのGHQのニュースフィルムを見ていると、マッカーサーがお昼御飯を食べるころに、マッカーサーと呼び捨てにしてみましたけれども、当時、日本一の権力者が第一生命ビルを出て、階段をおりて迎えの車に乗るのは大体16秒だと。毎日同じことをやって16秒で歩いていくのですけれども、それを見るために日本中から黒山の人ばかりで人がいて、マッカーサーがその群衆に驚くというニュースフィルムなのです。

この2つを見ていると、日本人ぐらいやじ馬根性があるというか、好奇心がある人たちはいないので、先ほどのシステムをつくるときにもやはり根底は私は好奇心だと思うので、ここにいる人たちにもあと5年間好奇心を忘れずに、若く頑張っていたいただきたいと思えます。

ありがとうございました。

○関口委員 ありがとうございました。

先ほど吉本委員からも、一般の家庭に非常に文化がしみついているというお話がありましたけれども、一般の方々の民度の高さというのは非常に大きなレガシーになると感じます。

次に、まちづくりについては、今回のテーマでもありますので非常に多くの御質問をいただきました。特に超高齢化社会の問題解決というのは非常に大きな問題となっておりますけれども、こちらの視点から専門家であられます酒向委員からよろしく願いいたします。

○酒向委員 超高齢化社会において、全ての世代、特にハンディキャップのある方、超高齢者の方をどこで元気にしていくか。これは街でしかないわけです。街で元気にしていく。そのために誰が支えるか。これは全ての世代、特に若い人を中心とした世代です。

こういった体制ができた街で、今までおうちの中にもっていた方を外出して元気にする。そのためにはその自治体のコア地区が必要です。

コア地区というのは、先ほどちょっと説明しましたように「道」です。ということは、線から面への展開になります。そういった自治体のモデルをまずオリンピック・パラリンピックまでにつつくり、それを全国発信、世界発信していく。こういった流れが必要になってくると思います。

大変だ、かわいそうということではなくて、格好いい、品がいい、そういったハードとソフトを発信するということが大切だと思っています。

○関口委員 ありがとうございます。

続きましては、街の国際化についての御質問です。多くの訪日外国人が東京オリンピック・パラリンピックを目指して、また、それ以降も増加すると考えられますけれども、果たして日本人はそういったことを受け入れる気持ちがあるのかどうか、そういった不安面に関する御質問が寄せられています。

その点、国際化の対応に尽力されてきた加藤委員からよろしく申し上げます。

○加藤委員 ありがとうございます。

去年ハイスクール・サミットをやってみて、ある韓国の高校生が最後の日に泣きながら私のところに来まして、とても感動したと。なぜかというと、同じクラスの日本人の高校生が、テレビとか新聞とかを読んで韓国人が大嫌いだったと。日本の国旗を焼いたりとか、もう本当にすごく嫌なやつではないかと思っていたけれども、君と出会って韓国に対するイメージも変わったし、一生の親友になれると思うと言われて本当にうれしかったと言ってくれたり、あと、中国の高校生たちが自分の国の紹介をするときに、中国もそうなのですが、韓国の高校生たちも、おもんばかって日本とかに侵略されたときの歴史をあえて省いて言わなかったりしたのです。そんなふうにおもんばかるというか、かえって若い人たちのほうがそういうところの優しさがあるのだなということを感じて、私はすごくうれしくなったのです。

私、2,000人の高校生たちをこれまで見てきて、逆に日本人の高校生たちのよさというの

は何かというと、そんなにがつがつしていない。特に今の若い男の子たちは草食系だとかよく言われますが、でも、それはすごくすばらしいことなのです。ある意味、がつがつしないで人のことを思いやることができるということなのです。

そういう意味で、人の話を聞いてまとめるとかというのは日本人はものすごく得意なのです。だから、そういうような意味でのおもてなしというか、若い人たちの視点で何かできること、世界のために何かやってあげられるボランティア精神、それは例えば福島だったりとか、どんなところで災害が起きても、今、若い人たちはどんどん自分の気持ちから行ってやっていますよね。そういう意味で、国際化というのは、今、常に若い人の目線ではもうできているのではないかなと私は思います。

今、一つ足りないのは多分英語力ではないかと思うのです。そういう意味で、例えば列車の中だとか、いろいろなところに缶詰にして、もうみんなとにかく英語でしゃべらなくてはいけないとなると、かえって英語力もつくと思いますし、これから地方自治体の中でそういう若者交流というのが、先ほど青木さんからあった「ホストシティ・タウン構想」ですか、1つの場所で1つの国や地域を支援するというようなことをやっていくと、おのずと国際化というのはできていくのではないかなと、ちょっと楽観的かもしれませんが、そういうことを思っています。

○関口委員 ありがとうございます。

5年後といいますと例えば中学校3年生が20歳ぐらいになる年ですので、若い世代の育成も大人の使命だと感じます。

続きまして、文化プログラム、レガシー化ということで吉本委員からもいろいろと事例を御紹介いただきましたが、日本国内において、先ほどもありました「1%フォー・アーツ」の活動に長年御尽力されてきた滝座長のほうから、文化プログラムについて具体的なアイデアがあれば、ぜひ御教授いただきたいと思います。よろしくお願いします。

○滝座長 それでは、思いつきですけれども、2つばかりお話しします。

これは私どもが7年前から始めているのですが、1都3県の大学に声をかけて、学園祭グランプリをオリンピックまでに日本のオリジナルなお祭りにしようよと。これは非常に盛り上がっています。去年と今年では20倍、30倍になって、お互いに自分で自分の大学の学園祭を動画にして徹底的にSNSで展開する中で、ものすごいアクセスになっています。やはり若者を中心にしなればいけないのではないのかなというのが1つです。

もう一つ、今、この「1%フォー・アーツ」というのは日本だけがやっていないという話で、51年前からアンドレ・マルロー文化大臣が言い出したのです。

その原点になるのがハーバート・リードの詩なのです。「今、我々に欠けているのは芸術家ではない。大衆である。芸術に意識を持つ大衆ではない。無意識的に芸術的な大衆である」と。

日本は非常に高い文化を持っている割に、知っている人もいますけれども、知らない人もいる。間違いなくそれがすばらしいことであるということを経戦後の日本人は割と知りま

せん。そういう意味では、公共工事の1%を芸術に使うのだというのは、逆に言うと、国民の価値観がなければ成り立たないのです。ですから、これを目指そうよと。

一つの例ですけれども、偶然我々は今、被災を受けています。福島を中心に146カ所で受けているわけですが、ここから先も10兆円を超えてお金が入ってくるのです。公共工事費の1%のルールがあると、例えば10兆円入ったとしたら1,000億円あるのです。そうすれば、ほかの公共工事はそれでやったパブリックアートでいいですけれども、例えばこの1%で、世界の芸術家に声をかけて、人類の恒久的な平和とは何だろうというテーマで、みんなで作品をつくってもらって被災地に展開していく。これをやり遂げたら間違いなく大変なレガシーになるというか、日本人が自分の持っている文化の価値に気がつくといいますか、江戸時代から素晴らしいものを持っているわけですが、そんなことで一つ提言したいと思います。

○関口委員 ありがとうございます。

残念ながらお時間が少なくなってまいりました。

最後に、基調講演をいただきました吉本委員、青木委員のほうから、まず、吉本委員からは、特に地方、中山間地ですとか、徳島の映像も発表いただきましたけれども、東京以外のところで何ができるかという点、青木委員に関しましては、東京からプラスワンというところでほかの都市にどうやって足を運んでいただくか、ツーリズムの視点から、まとめという形でお一言ずつお願いしたいと思います。

まず、吉本委員のほうからお願いします。

○吉本委員 ありがとうございます。

私は、文化プログラムというのは、地方都市といいますか、農山村といいますか、逆に国際的に知られていないところほどチャンスがあると思います。

例えば東京のような大都市の情報というのは、もう世界中にある程度流布していますし、東京で行われているさまざまな芸術というのは既に国際的に流通しているようなものだったりします。でも、小さな田舎町や農山村に行くと、逆にそこにしかないもの、日本独自のものがたくさん残されていますし、そういうものを国際的に発信するチャンスになると思うのです。

特に申し上げたいのは、地元の方々が、こんなものは世界の人に受けないだろうと思っ  
ていらっしゃるものに限って、その地域独自のものであり、先ほど滝会長からもお話がありましたけれども、日本が長い間の歴史の中で培ってきた文化が集約されているものだという  
ことです。そういうものに魅せられた外国人が小さな農山村に移り住んでいるという  
ような例もたくさんありますから、むしろそういうものほど価値があり、アピールすべき  
で、五輪はその大きなチャンスではないかなと思います。

○関口委員 ありがとうございます。

では、最後に青木委員より、お願いします。

○青木委員 ありがとうございます。

先ほどの講演の中で、2020年以前から「ホストシティ・タウン構想」みたいないろいろな交流事業を行う。情報発信をする。そのために自分の地域のいろいろな資源を見つめ直す。それを今、吉本委員がおっしゃったとおり、こんなものが受けるのかなとか、こんな田舎に人は来ないよとか、来ててもどう対応するのかというような受け皿の問題があると思います。

今、テレビで、日本の出番だとか、日本のここがいいよみたいに、いろいろ日本の自慢をする番組がございます。あれを見ると、本当にえっと思うようなもので、ものすごく感動するコンテンツがたくさんあります。

ですので、そういった事前のことをやりながら、なおかつ自分の持っている地域のいろいろな魅力ですとか、そういうものに自信を持っていただきたいと思います。

食にしる、伝統芸能にしる、習慣にしる、日本古来から持っているライフスタイルをありのまま見せる。外国人が来るからここをきれいにしなければいけないとか、整備しなければいけないとか、ここに新しい旅館をつくらなければいけないとかは一切必要ないと思います。今のありのままを見ていただく。地元の方の交流というきっかけをどうにか地域でつくっていただく。

これも食であり、お祭りであり、いろいろな切り口があると思いますが、こういったことを地道にしながら、国が進めているいろいろな構想に乗っかっていただいて、2016年以降から事前交流プログラムも含めていろいろやっていって、とにかく情報発信をしていただく。多分何もしないと増えないと思います。

以上です。

○関口委員 ありがとうございます。

皆さん、それぞれ専門分野の異なる方々の御発言、御意見をいただきましたけれども、お話を伺いまして、共通する面を幾つか皆さんも感じ取っていただけたのではないかと思います。

例えば映像、画像で見たお写真では、写っている方々はみんな楽しそうに笑っていらっしゃいますよね。そういった形で、地域活性化というのはやはりしかめ面してやるのではなく、皆さんが自分事としてやるということが大事であるということ。

何人かの専門家の方からも共通のお話がありましたけれども、現場発信、現地の人ややっていくという部分や、デジタル化の社会でいかに多くの世界中の方々に知っていただくか発信、PRをする。そういった部分が共通する部分であったのではないかと思います。

それぞれの地域でヒントの一つにでもなればと思ひまして、当研究会は議論を重ねてまいりました。きょうの発表も皆様のヒントの一助になればと思っております。

こちらでパネリストの方々のパネルディスカッションを終了させていただきたいと思ひます。

ありがとうございました。（拍手）

○司会 どうもありがとうございました。

以上で本日予定しておりましたプログラムは全て終了いたしました。パネリストの皆様、大変ありがとうございました。

本日は、多くの皆様に御参加いただきまして、ありがとうございました。

これで第52回「ESRI－経済政策フォーラム『オリンピック・パラリンピックを契機とした地域活性化』」を終了いたします。

最後に、御登壇いただきました皆様に盛大な拍手をよろしく申し上げます。（拍手）どうもありがとうございました。

お帰りの際は、なるべくお忘れ物のないようお願いいたします。また、アンケートは、受付にお願いします。

どうもありがとうございました。